

Title	福澤諭吉の「芸術」の概念
Sub Title	Concept of 'art' in Fukuzawa Yukichi's writings
Author	海津, 忠雄(Kaizu, Tadao)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2009
Jtitle	Booklet Vol.17, (2009.) ,p.57- 73
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	FUKUZAWA Yukichi 2
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000017-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤諭吉の「芸術」の概念

海津 忠雄

序 美術教育の黎明

福澤諭吉（1835-1901）は明治4年（1871）に慶應義塾を芝新銭座から三田に移し、『学問のすゝめ』を書き始めた★¹。維新政府はその前年12月12日（陰暦閏10月20日）に工部省★²を設置し、伊藤博文（1841-1909）を工部大輔に任じた。工部省は明治4年4月に「万国ト併立富強ヲ保チ候様致度」「実学知識ノ徒」の教育機関「工部学校」を設立する趣旨の建言を上奏した★³。同年7月に太政大臣に就任した三條実美は、明治5年（1872）3月2日の太政官布告で工部省の建言を領掌し、学校名を「工学校」に改めたうえで工部省工学寮★⁴の管轄とし、小学校（予科に相当）を同年7月15日、大学校を明治7年（1874）7月15日に開校し、ヨーロッパ人を両校教官に選任することを付託した★⁵。教官たちが明治6年（1873）6月3日に来日し、工学校は同年8月22日に開校した。伊藤工部大輔は明治4年11月12日から同6年9月13日まで岩倉使節団副使の一人になって渡航し、その間の事務一切は工学寮の工学頭を兼務する工部大丞 山尾庸三（1837-1917）に任された。山尾は明治5年に工部少輔、明治6年に工部大輔に昇進した後も工学寮を取り仕切った★⁶。伊藤は明治6年10月に工部卿を拝命する。明治10年（1877）1月11日の工部省の改組に合わせて工学校は「工部大学校」に改称され、工部省廃止の翌年、明治19年（1886）3月に帝国大学に併合され、帝国大学工科大学（後の東京帝国大学工学部）が誕生した。

今述べたことと並んで重要な一件がある。工部省は明治9年（1876）11月にイタリア人の教官3名を招いて工部美術学校を開校した。これは先にヨーロッパを視察した伊藤の開明思想に基づく教育機関であり、明治22年（1889）に国家主義的学政によって創立された東京美術学校とは理念を異にする。「明治十四年の政変」が起こった明治14年（1881）から明治政

府は儒教主義の反動的な教育政策に変節し、明治16年(1883)1月に工部美術学校を廃校にした。工部美術学校の理念には、本稿のテーマである福澤諭吉の「芸術」の概念との接点も認められる。

福澤の著作のうち純理論的なものは、わずかに明治8年(1875)8月20日に発売された『文明論之概略』があるだけで、多くは時事評論に類するものだといわれる。それは慶應義塾が各界に多くの人材を送り出し、福澤が各界の動静を的確に探り得た結果である。小泉信三(1888-1966)が福澤をエドモン・ロスタンの戯曲の主人公シラノ・ド・ベルジュラックに擬したのは炯眼である★⁷。福澤は明治14年に始まる教育政策の変節を、明治24年(1892)9月11日の『時事新報』社説「教育の方針変化の結果」で論評し、晩年『福翁自伝』でも冷評することになる。

昭和38年(1963)に『三田評論』は二号にわたり高橋誠一郎(1884-1982)の「明治十四年の政変と日本美術界」を連載した★⁸。この論考は、昭和37年(1962)11月1日に慶應義塾恒例の三田演説会で行なわれた講演「日本美術界に及ぼした明治十四年の政変」の速記録に加筆したものであり、「明治十四年の政変」が福澤に与えたショックと、開化を標榜する美術教育の挫折について詳述する。同日の三田演説会では小泉信三も「澤木四方吉と慶應義塾」を語った★⁹。

1. 「芸術」の意味

福澤諭吉と美術

福澤諭吉は豊前中津藩の士族であったとはいえ、武士の嗜みとして美術のことを多少心得ていたであろう★¹⁰。明治11年(1878)5月には評論「国の装飾の事」を書き、慶応4年(明治元年[1868])4月20日(陰暦3月28日)の神仏分離令と、それに起因する廃仏毀釈運動を批判し、信心の有無を離れて「一国の装飾たる可き」古社寺の荒廃を嘆いた★¹¹。また、年代不詳ながら「国光発於美術」(国の光は美術に発す)と揮毫した一幅の掛軸(神崎丈二旧蔵)も知られている。

肖像写真を美術作品に数えるのは適切ではないが、それが福澤の肖像彫刻・肖像画の基礎になった事実があるので看過できない★¹²。工部美術学校でイタリア人彫刻家ヴィンチェンツォ・ラグーザ Vincenzo Ragusa (1841-1927)の指導を受けた大熊氏広(1856-1934)が、明治26年(1893)10月に完成した《福澤諭吉座像》(慶應義塾志木高等学校所在)の制作には自らポーズをとったが、洋画家川村清雄(1852-1934)が明治31年(1898)から描き始めた福澤の肖像画は写真に基づくものであった★¹³。写真技術の歴史をたどると、フランス人ダゲール L. J. M. Daguerre がダゲレオタイプを発明したのは1839年であり、1848年(嘉永元年)頃には日本にすでに写真師が現われている。記録を欠くが、福澤は短い長崎時代(1854-55)に写真

技術を知ったと考えてよい。彼は自然科学に造詣が深かったので、写真技術の原理に興味をもって当然である。

しかし、福澤が美術を殊更に論じることはなかったであろう。それは明治初年の著作『学問のすゝめ』や『文明論之概略』で技術について多くを語ったのと対照的である。福澤は故郷中津で漢学を修め、次いで安政2年(1855)から同5年まで大阪の蘭方医緒方洪庵の適塾で、医学と自然科学を学んだから、自然科学の上に成り立つヨーロッパ人の技術に畏敬の念を抱いていた。その一端は、『文明論之概略』第六章「智徳の辨」で、ヨーロッパ人の技術は「積年有形の理学〔自然科学〕を研究して、その功績漸く事実に顕われたるものなり」と言ったことに表われている。

福澤は明治5年(1872)2月から同9年(1876)11月まで続刊した小冊子『学問のすゝめ』17編のうち、明治7年(1874)6月に出版した『学問のすゝめ十編』でただ一度「芸術」と言っている★¹⁴。明治8年の『文明論之概略』にはこの用例が見当たらないので、それは稀有なことである。『学問のすゝめ』のこの個所を読んでみる。(下線、筆者)

「昔日は世の事物皆旧格〔古法〕に制せられて有志の士と雖ども望みを養うべき目的なかりしが、今や然らず、この制限を一掃せしより後は、あたかも学者のために新世界を開きしが如く、天下、処として事をなすの地位あらざるはなし。農となり、商となり、学者となり、官員となり、書を著し、新聞紙を書き、法律を講じ、芸術を学び、工業も起すべし、議院も開くべし、百般の事業行うべからざる者なし。」

「芸術」は英語の‘art’の訳語であろう。‘art’には多義があり、「技術」も意味する。「技術」は福澤の語彙にあるので、この個所では「技術を学び、工業も起すべし」とも言えたはずである。もし福澤が「芸術」という言葉でヨーロッパの「造形芸術」fine artsを考えていたとすればどうなるか。彼はおそらくヨーロッパ美術の写真的リアリズム photo-realism を考えたであろう。それゆえ「芸術」は極度に「技術」に近いものであった。周知の話でそれを解明する。

福澤の蘭学の同僚神田孝平(1830-98)が慶応3年(1867)に本郷通湯島聖堂裏の露天で、江戸時代末期の蘭方医杉田玄白(1733-1817)の晩年の著書『蘭学事始』(文化12年[1815])を見つけた。これは直ちに数部の写本を生み、福澤はそれを読んで「感極りて泣かざるはなし」と言うほどの感動を覚え、王政維新の変乱の最中であった明治元年(1868)に、玄白の曾孫杉田廉卿(れんけい)に出版を勧めて金数円を醸出した。明治2年(1869)正月にこれが出版された裏話である。

杉田玄白はこの書物で、明和8年(1771)3月4日に江戸千住骨ヶ原で屠者が行なう女刑死者の遺体の腑分(解剖)を、前野良沢(りょうたく)、中川淳庵(じゅんあん)(1739-86)らと共に実見した時のことを述べている。良沢と玄

白は観臓の現場に図らずも同版のオランダ書『ターヘル・アナトミア』(1734年刊)を携えていた。「良沢と相ともに携へ行き和蘭図に照らし合せ見しに、一としてその図に聊か違ふことなき品々なり。」★¹⁵ 逆に言えば、オランダの人体解剖図は「漢説の図には似るべくもあらざ」る精確な線描画であった。良沢、玄白、淳庵は帰路『ターヘル・アナトミア』の翻訳の企てに同調し、苦心惨憺の末、まず安永2年(1773)正月に玄白著、淳庵校閲、熊谷元章画3図を束ねた、わずか5葉の『解体約書』を出版し、安永3年8月に玄白訳、淳庵校閲、医師石川玄常(1744-1815)参画、官医・法眼桂川甫周(1751-1809)校閲になる『解体新書』を刊行した。これに添えた秋田蘭画の画家小田野直武(1750-80)の附図が重要である。

福澤がいた大阪の適塾では「犬猫は勿論、死刑人の解剖その他製薬の試験は毎度のことであった」(自伝88頁)ので、彼もオランダ伝来の人体解剖図を知っていたであろう。それはオランダの画家レンブラント(1606-69)の《ニコラス・テュルプ博士の解剖学講義》(1632年)と《ヨアン・デイマン博士の解剖学講義》(1656年)で見る明暗法を用いた油彩画と異なり、精緻な線描による写真的リアリズムの作品である。この医学の産物が福澤にとっての「芸術」であった。

美術あるいは技術

維新時代にはヨーロッパ美術は「技術」と同一視された。工部省付属の工部美術学校の学則に「美術」を「技術」と呼んだ事例がある。工部美術学校は画家アントーニオ・フォンタネージ Antonio Fontanesi (1818-82)、彫刻家ラグーザ、幾何学や遠近画法を教える建築家ジョヴァンニ・ヴィンチェンツォ・カッペレッティ Giovanni Vincenzo Cappeletti (? -1887) というイタリア人の教官を招聘して、明治9年(1876)11月6日に設立され★¹⁶、同月21日に開校した。ここで画家小山正太郎、浅井忠、松岡寿、前述した彫刻家大熊氏広などの逸材が育った。工部美術学校は明治10年(1877)8月25日によりやく「工部美術学校諸規則」を整えて工部省に届け出た。それは「学校ノ目的」を次のように定めている。(下線、筆者)

「美術学校ハ欧州近世ノ技術ヲ以テ我日本国古来ノ職風ニ移シ、百工ノ補助トナサンガ為ニ設ルモノナリ」★¹⁷

この条文で言う「技術」は、学校名を考えても「美術」と同義語でなければならない。『学問のすゝめ』の「芸術」が「技術」と同義語であるのと同断である。「技術」は単なる描写の技量のことではない。『解体約書』において熊谷元章が見せる、『解体新書』において小田野直武が見せる、ひいては小田野直武の主君である秋田藩主佐竹曙山の蘭画が見せる、「和蘭図」の巧みな複製の域を超えて、自然観察に基づく描写である。その根柢に自然科学の知識がなければならない。英語の 'art' の古義に 'science'

がある。福澤は『文明論之概略』第六章「智徳の辨」で「文学★¹⁸ 技芸は智恵の事なり」と言う。「技術」とその同義語「芸術」は「智恵の事」すなわち「学問」scienceである。工部美術学校の教官になった画家アントーニオ・フォンタネージは明治9年11月21日の開講の辞で、絵画の基礎はまさしく「学問」であると語っている。

「画学家ノ目的ハ何ゾ。天然物、人造物ヲ模写スルニアリ。〔中略〕真ノ画家タラント欲セバ、筆ヲ取ラザル前ニ幾何学、遠近画法、解剖学ノ三者ヲ研究セザル可カラズ。天然物又人造物ノ種類^{あまた}許多ナレドモ、如何ナル者ヲ画クニモ第一ニ光線ノ方向ニ注意スルコトヲ要ス。」★¹⁹

フォンタネージはまずルネサンス絵画の造形原理になった「幾何学、遠近画法、解剖学」の必要性を語り、彼自身がフランスのバルビゾン派に近い風景画家であったので、日本画家には「光線」の認識が欠如していると述べたのである。受講者はこれを聴いて驚嘆し、違和感を覚えたであろう。それは、アルブレヒト・デューラー（1471-1528）のイタリアのルネサンス絵画の影響を受けた作品を初見した時に、15世紀末のドイツ人が与えられた印象にも等しかったであろう。

デューラーは1525年に『測定術教本』を出版した。彼はこれを親友ヴィリバルト・ビルクハイマー（1470-1530）に献呈し、その献辞で言う。「わがドイツ国ではこれまで多くの有能な徒弟を何らの原理 grundt もなく、もっぱら日常的な習慣によって絵画の学 kunst der mallerey に向わせてきました。」デューラーの時代のドイツ語では、'kunst' は第一義的に Wissen（知識）、Wissenschaft（学問）、Lehre（学科）であった。「測定の学 kunst der messung はすべての絵画の真の原理である。」★²⁰『測定術教本』は幾何学と遠近画法のハンドブックになった。デューラーはその中でアルファベットの美しい書き方、光線の学である日時計の製造法、遠近法的に精確に写生するための補助器具を、木版画の絵入りで教えている★²¹。デューラーはまだ解剖学研究の機会を得なかったが、同時代のレオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519）やミケランジェロ（1475-1564）は解剖学を自家薬籠中の物とした。デューラーもイタリア人に倣って人体比例を研究しており、彼の最終的な課題は人体比例論を著述することであった。これは彼の没後に『人体比例論四書』（1528年）として出版された。レンブラントも一時期この書物を所蔵していた。

「積年有形の理学を研究して、その功績漸く事実に顕われたるもの」であるヨーロッパ人の技術は「智恵の事」（『文明論之概略』）である。この定義にしたがって「芸術」を考えれば、デューラーの言う絵画は技術の範疇に属する。したがって、福澤が『学問のすゝめ十編』で述べた「芸術を学び、工業も起すべし」は、「技術を学び、工業も起すべし」の意味となる。

維新政府にとってヨーロッパ人の技術を習得した技官の養成はいかに急

務であったか。それが伊藤博文の起草した工学校設立の建言文に表われている。次の章はこの話から始まる。

2. 維新政府の理想

工学校の設立

工部省は明治4年(1871)4月に工部学校設立の建言を上奏し、次のように言っている。

「〔前略〕方今数多ノ外国人ヲ使役御創業ノ手順取継^{とりつぎまかりあり}罷^や在候次第〔、〕
実ニ無余儀事ニテ〔、〕終始彼等ノ余力ヲ仮リ〔借り〕功業〔事業〕漸
ク相遂候様ニテハ一時開化ノ形況〔景況〕有之候トモ〔、〕万世富強ノ
御基本ハ^{とて}速^{あいたちもうすま}モ相立^{じく}申間敷〔、〕戦^{せん}兢^{きやう}〔戦戦恐恐〕ノ至ニ候[。]此機ニ
臨ミ人材教育ノ御方途不可欠〔ノ〕場合ト被存^{ぞんじられ}候[。]就テハ当省中
ニ於テ工部学校至急御取建相成〔、〕少年有志ノ者ハ尽日校中ニ出入
孜々^{しし}勉学〔、〕^{そのさいげつをへ}経其歳月候ヘハ教師ノ指導ニ依リ順次洋行ヲモ為致〔、〕
成器ノ上夫々奉職〔、〕事ニ為^{したがわせしむべく}從^{したが}可^た〔後略〕」★22

明治6年(1873)7月に工部大輔山尾庸三が布達した生徒募集要項「工
学寮入学式 並^{ならびに}学課略則」は、学校の目的、学費免除、修業年限、卒業後
の奉職義務について具体的に述べている。

「第一 学寮ヲ設立スル所以^{おおい}ハ大ニ工業ヲ開明シ〔、〕以テ工部ニ従事
スルノ士官ヲ教育スル処ナリ[。]故ニ在寮ノ間ハ衣食住ヨリ諸経費
ニ至ルマテ官ヨリ之ヲ給与スヘシ〔後略〕」

「第二 成業ハ概ネ六ケ年ヲ以テ定限トス〔中略〕満期後ハ七ケ年間
本省ノ指令ニ從テ奉職勉励スルハ勿論タルヘシ」★23

これに先立って明治5年(1872)3月2日の太政官布告「工学校略則」
は次のように定めた。

「工学校之ヲ分テ大学小学ノ二校トス」

「二校ノ教官悉ク西洋人ヲ選任ス」

「都^と検^{けん}一員ヲ選任シテ二校ノ教官ヲ統轄セシム^{ただしま}〔、〕但^た亦^だ西洋人ヲ用ユ」★24

したがって、工学校はヨーロッパから教官を招聘しなければならない。
時代を遡れば、文久3年(1863)6月に長州藩士井上馨(1835-1915)、伊藤
博文、井上勝(1843-1910)、遠藤謹介、そして山尾庸三は、藩主の内命を
受けてイギリスへ密航、留学した。彼らはロンドンでイギリス、アメリ

カ、フランス、オランダ四国連合艦隊の長州藩攻撃計画を知り、井上馨と伊藤は元治元年（1864）6月10日に帰国した。実際、同年9月（陰暦8月）5-8日に四国連合艦隊の馬関（下関）攻撃が行なわれた★²⁵。他の3名はイギリスに滞在し勉強した。遠藤は慶応2年（1866）に帰国し、後に大蔵大丞になる。井上勝は明治元年（1868）に帰国し、明治3年（1870）に工部省が設置されると同時に工部権大丞になり、翌4年から鉱山頭と鉄道頭を兼務し、後に工部大輔、鉄道局長官となる。山尾はスコットランドのグラスゴー大学で造船学を学んで明治3年に帰国し、工部省に入った。岩倉使節団副使の伊藤はかつて山尾がグラスゴーで師事した土木・機械学教授ランキン W. J. M. Rankine に工学校教官の人選を依頼し、都検として当時24歳のヘンリー・ダイアー Henry Dyer (1848-1918) の推薦を得た。都検ダイアーと教官5名すなわちエアトン William Edward Ayrtton (宛理術 natural philosophy)、マーシャル David H. Marshall (数術 mathematics)、ダイヴァーズ Edward Divers (化学 chemistry)、モンディ Edmond F. Mondy (図画学 drawing すなわち製図法)、クレギー William Craigie (英学 English language and literature)、そのほかに模型師1名と助手2名は明治6年（1873）6月3日に横浜に到着した★²⁶。

工学校の学科構成は総合工科大学を模したように6学科から成っていた。土木学をダイアーとペリー J. Perry、機械学をダイアー、電信学をエアトン、実地化学をダイヴァーズが担当した。冶金・鉱山学には専任者がなく、冶金学をモンディが代講し、明治9年（1876）にミルン J. Milne を招聘して採鉱学を担当させる★²⁷。造家学（「建築」は江戸末期の造語である）は工学校では欠講であり、明治10年（1877）に工学校が工部大学校に昇格した年、イギリスの建築家ジョサイア・コンドル Josiah Conder (コンダー、1852-1920) を招聘して開講される。

工学校は1848年にチューリヒに設立されたスイス連邦工業専門学校（ポリテクニクム Polytechnikum）に範を取ったという説が、昭和6年（1931）の『旧工部大学校史料』（旧工部大学校史料編纂会編）以来流布したが、近年の研究者たちはこの説に否定的である★²⁸。思いつくところでは、工学校にはウィリアム・クレギー以外に人文科学系の教官がいらないが、チューリヒでは建築学教授ゴットフリート・ゼンパー（1803-79）と同じく1855年に、考古学・美術史教授ヤーコプ・ブルクハルト（1818-97）が就任している。ブルクハルトは新刊の『チチェローネ』を引っさげて登場した少壮の学者であり、1858年にバーゼル大学の歴史学教授に招聘されるまで、チューリヒ時代に1860年の名著『イタリア・ルネサンスの文化』を準備したのである★²⁹。これを見ただけでも、工学校はスイス連邦工業専門学校の足元へも寄りつけない。

工部省が明治4年4月の建言文に付した「見込取調書」は二つの重要な項目を含んでいる。それは「大学校ニ於テ修行中ハ諸工学科技術ニ渉リ活物実地ノ修行モ爲仕^{いたさせ}」ということと、「伝習生徒月俸等ハ銘々ヨリ爲差出^{わた}」^{さしださしめ}

そうろうあいだ

候 間」官費は一切不要ということである★³⁰。明治5年(1872)3月2日の太政官布告「工学校略則」は「定額金」(「授業料」は福澤諭吉の造語である。自伝201頁)を、「二校共ニ生徒每一員ヨリ每一月金拾円ヲ收領シテ其学資及飲食衣服等一切ノ費用ヲ弁済ス」と定めた★³¹。しかし、工部大輔山尾庸三は教官来着後、明治6年6月に太政大臣三條実美に「工学校略則廃止および入学式学課略則制定に関する工部省伺」を上申した。すなわち、

「工学校略則ノ義〔、〕生徒ハ総テ私費ヲ以テ入学為致候規則ニ候得共〔、〕孰レ諸工業ヲ興隆センニハ速カニ諸学課熟達之者ヲ得ルニ之レアリ候得者〔、〕当分人員三十名ヲ撰ヒ官費ヲ以入学差 許 度」★³²

と申し立て、同年7月27日に認可された★³³。こうして、山尾は同年7月に布達した「工学寮入学式並学課略則」で、入寮試験の成績優秀である甲科及第30名には「直チニ入寮ヲ許シ」、乙科及第20名は「日々学校ニ私費ヲ以テ通学セシメ」「来年入寮試験ノ時再ヒ及第スル者ハ本生徒トシ入寮ヲ許ス」と記した★³⁴。修業年限と卒業後の奉職義務は前述のとおりである。実際には工学校は官費生20名を入寮させ、明治6年8月22日に開校した★³⁵。入寮者中に後の建築家曾禰達蔵(1853-1937)と辰野金吾(1854-1919)がいる。工学校が工部大学校に昇格した後のことであるが、明治10年(1877)10月3日に改正届出の「工部大学校学課並諸規則」は、官費生の「七年間工部ニ奉職スルノ義務」を変えず、「私費生ハ其月ノ経費トシテ毎月 初 金七円ヲ上納セシムルヲ以テ七年間奉職ノ責ヲ免ス」と改めている★³⁶。

ところで、福澤諭吉は工学校の経営方針に数々の疑義を抱いたであろう。まず授業料に関して。子弟に良い教育を授けたいと思う父母は、金を惜しんではならないと言うのが福澤の持論である。事実、慶應義塾と命名した慶応4年(明治元年〔1868〕)に「授業料」と称して生徒から毎月金2分を取り(自伝201頁)、明治2年(1869)には入社(入学)に3両、授業料は月額2分、盆と暮に千匹と定めている★³⁷。もちろん校納金による収益は生徒数に比例する。西南戦争があった明治10年(1877)に塾生が激減して慶應義塾の経営は危機的状況に陥り、同11年と12年に政府の資金援助を要請した★³⁸。しかし、この資金調達は実現しなかった。

次の問題は外国人教師の俸給である。都検ヘンリ・ダイアーの月給は660円であり、究理学教官ウィリアム・エドワード・エアトン(1849-1908)と化学教官エドワード・ダイヴァーズの月給はそれぞれ500円であった。彼らは文部省の雇い教師よりも高給取りであった★³⁹。福澤は明治9年(1876)2月に書いた「学者安心論」でこれを慨嘆する。「この外国人は莫大なる月給を取りて何事をなすか。余輩、未だ英国に日本人の雇われて年に数千の給料を取る者あるを聞かず。〔中略〕内国にその人物なきがゆえなり。学者に乏しきがゆえなり。」★⁴⁰

工部大学校への昇格、そして帝国大学との併合

明治 10 年（1877）1 月 11 日に工部省は寮を局に統合し、工学校を「工部大学校」と改称した。

「工作局ヲ置キ工学製作二寮ノ事務ヲ管ス。工学校ヲ工部大学校ト称ス」★41

工部大学校はこの年にイギリスの建築家ジョサイア・コンドルを招聘して、造家科を開講した。彼は建築術、デザイン、建築史を教授した★42。辰野金吾と曾禰達蔵らが明治 12 年（1879）に工部大学校造家学第一回卒業生となった。辰野は翌年 2 月に官費留学生として渡英し、明治 18 年（1885）に帰国して工部大学校造家学教師に採用され、さらに明治 19 年（1886）には帝国大学工科大学（後述）の造家学教授に就任する。曾禰の活躍については後述する。

明治 10 年 4 月 12 日に東京大学が創立され、東京開成学校を法学部と理学部と文学部に、東京医学校を医学部にした。法・理・文三学部の予備課程として予備門を設けた★43。明治 18 年 12 月に東京大学は理学部に造船学科を設置し★44、同時に工芸学部を設置して、理学部から機械工学、土木工学、採鉱冶金、応用化学の 4 学科を工芸学部に移した★45。明治 18 年 12 月 22 日に内閣制度の確立により工部省は廃止され、工部大学校は文部省に移管された★46。明治 19 年 3 月 1 日に帝国大学令が制定されて東京大学は帝国大学となり、工部大学校を併合したが、これを工芸学部に吸収せず、両者並立の形で帝国大学工科大学を設立し、土木工学、機械工学、造船学、電気工学、造家学、応用化学、採鉱冶金学の 7 学科を置いた。なお、明治 30 年（1897）に京都帝国大学が創設されるとともに帝国大学は東京帝国大学と改称される。

帝国大学工科大学は「ほぼ工部大学校の編成を踏襲した」といわれる★47。これを確認するために相互の学科編成を照合すれば次表のとおりである。

工部大学校	東京大学工芸学部	帝国大学工科大学
土木学	土木工学	土木工学
機械学	機械工学	機械工学
電信学		電気工学
造家学		造家学
実地化学	応用化学	応用化学
冶金・鉱山学	採鉱冶金学	採鉱冶金学
	理学部の造船学	造船学

工学校から工部大学校まで一貫して重視されてきた、最終2年間の「実地ノ学」の学習は、東京大学の学制に欠如しているので★⁴⁸、工部大学校生は帝国大学との併合に反対して、明治19年1月に初代文部大臣森有礼^{ありのり}に工部大学校長大鳥圭介（1832-1911）が加筆した上申書を提出した★⁴⁹。

帝国大学令に刺激されて慶應義塾でも大学部設置の気運が起こったが、文学科と理財科と法律科をもつ大学部が実現したのは明治23年（1890）であった★⁵⁰。文学科3年の科目に審美学（美学）があり、明治25年（1892）9月に鷗外森林太郎が審美学の講義を開始した。軍医である彼の講義は軍務による休講もあったが、明治32年（1899）6月彼が小倉師団に転勤するまで続いた★⁵¹。

美術教育の盲点

帝国大学農科大学について一言述べておきたい。明治19年（1886）7月に農学科、農芸化学科、獣医学科などをもつ駒場農学校が東京山林学校と合併して、農商務省所管の東京農林学校になったが、明治23年（1890）に文部省に移管されて帝国大学農科大学になった。幕府の小石川薬園は小石川植物園と改称され、明治10年（1877）に東京大学理学部の研究機関になっていた。帝国大学農科大学の農学科第一部で第2年次に履修する学科に園芸学がある。これは造園術が帝国大学工科大学造家学科には無縁の学科であることを意味する。明治期以来見るべき洋風庭園が建築家によって作庭されず、都市公園の建設にとどまった理由は、建築学が工学の領域に属し、造園術は農学の領域に属するという、いわば縦割り行政にある。

建築と庭園の関係は、ヨーロッパでも国により異なるので一概には言えないが、イタリア式庭園ではその設計は明らかに建築家の仕事であった。ローマ近郊ティーヴォリのヴィラ・デステや、フィレンツェのボポリ庭園はその実例である。どちらも17世紀に建設され現存する。フランスのルイ14世に寵愛された造園家ル・ノートル André Le Nôtre（1613-1700）が設計したヴェルサイユ庭園も、主軸線を強調した建築的なものである。他方、イギリス式庭園は自然の風景を人工的に模倣するものであり、設計は建築的でなくとも、フォリー folly と称する模造建造物を庭内に点在させる★⁵²。イギリスのパーリントン伯リチャード・ボイル Richard Boyle（1694-1753）はイタリアの建築家パッラーディオ Andrea Palladio（1508-80）の研究者であったが、彼が信服したイギリスの建築家はウィリアム・ケント William Kent（1685-1748）であった。ケントは建築家であるとともに「近代造園術の真の父」といわれる進歩的な造園家でもあった。同時代の造園家には ha-ha（沈め垣・隠れ垣）の創案者チャールズ・ブリッジマン Charles Bridgeman（?-1738）や、ケントの弟子ランスロット・ブラウン Lancelot Brown（1716-83）などがある。

工部大学校がイギリスから招聘したコンドルは日本の伝統文化に配慮し、あえて折衷様式を選んだのであるとしても、イギリス式庭園の伝統を

わが国に移植しようとせず、その雛型さえ呈示しなかったことは惜しまれる。たとえば、コンドルが政府高官の社交場として明治16年(1883)に東京の日比谷に建設した鹿鳴館は、庭園に一对の石塔と植え込みと円形の池を配置しただけであり、この景観から18世紀フランスの雅宴画(フェート・ギャラント)に描かれたような、社交界の貴婦人たちの艶姿を連想することは難しい。

もっとも、明治期の主要な洋風建築が先ず首都東京に建設され、敷地面積が狭隘であったうえに自然環境も異なったので、庭園に水を用いた施設も庭内の並木道も考えられなかった。洋風建築の建築主は庭園に奇岩奇石を集めることで満足した。わが国の建築家の最大の課題は、美観よりも地震と火災の災害に耐える建築を建設することであった。慶應義塾図書館(重要文化財)がこのことを立証する。慶應義塾は明治40年(1907)に開塾50年を祝ったが、その前年12月に「創立五十年記念図書館建設募金」を始め、募金高30万円を超えたので曾禰達蔵と中條精一郎の設計によって明治42年(1909)11月に定礎し、明治45年(1912)5月に完成した。この建物が大正12年(1923)9月1日の関東大震災と、昭和20年(1945)5月25日の空襲で被災したにもかかわらず完全に復興したのは、耐震性があり、焼失しない煉瓦造りの洋風建築だったからである。

3. 儒教の復権とその批判

「芸術」の概念の行方

明治3年(1870)から同18年(1885)まで存在した工部省は、初期には伊藤博文という優秀な総帥と、山尾庸三という能吏の活躍によって、維新の動乱の中でさえ開明に向けて革新的な政策を打ち出した。伊藤はすでに明治4年(1871)に「開化ノ形況」の行く末を洞察して工学校設立を建言し、これを実現させた。さらに明治9年(1876)には工部美術学校を開校し、ヨーロッパ美術の移植を図った。その趣旨からは、芸術は「学問」scienceであるというヨーロッパの古典的な芸術観を導入しようとする意気込みさえ察知される。福澤諭吉が明治7年(1874)に『学問のすゝめ十編』で「芸術」という概念を用いて言おうとしたことは、この時流に先駆けたものであった。しかし、その後に明治政府の教育政策は方向転換した。

明治10年(1877)に工部美術学校は工部大学校付属になった。これ自体は大した問題ではない。しかし、工部美術学校彫刻学科は明治15年(1882)6月28日に20名の生徒に卒業証書を渡して、同月30日に廃校になった★⁵³。画家フォンタネージは脚気を病み、2年間在日しただけで帰国したが、彫刻家ラゲーズも明治15年8月に帰国した★⁵⁴。同年12月に工部美術学校の閉鎖が決まり、明治16年(1883)1月23日に絵画科は廃校となった。廃校の理由は経営難とされるが、おそらく、工部美術学校の

「学校ノ目的」に言われた「欧州近世ノ技術」すなわちヨーロッパ美術の伝習の政策を、明治政府がみずから廃除したことによるのであろう。この教育政策の方向転換は、明治14年（1881）以来官界を席卷した儒教主義・国粹主義に威圧されたものであった。

このことは福澤の言う「芸術」の高邁な理念が、わが国に定着しなかったということでもある。彼は日本人の国民性を考えて、それを予見していたらしい。明治8年（1875）の『文明論之概略』第2章「西洋の文明を目的とする事」で言っていることは何か宿命論めいている。

「鉄橋石室〔石造建築〕を以て西洋に擬するは易しといえども、政法を改革するは甚だ難し。」

「ある人はただ文明の外形のみを論じて、文明の精神をば捨てて問わざるものの如し。」

精神は「目以てその形を見るべきものにあらざれば、その存する所を知ること甚だ難し」（福澤、同所）である。そもそも哲学や形而上学は日本人の国民性にそぐわない領域であることを、その二十数年後に新渡戸稲造（1862-1933）が英文著作『武士道』で指摘している。「我が国民が深遠なる哲学を欠くことの原因は武士道の教育制度において形而上学の訓練を閑却せしことに求められる。」^{★55} 果たせるかな、明治14年以来、初期の工部省の理想はその時流に押し流されて、霧氷のように消え去り、それがわが国の教育政策の指標として復活することはなかった。

福澤の論調が時流につれて変化したのは周知のことである。丸山眞男は福澤の儒教批判を前半期と後半期に分けている。前半期の儒教批判は明治初年の『学問のすゝめ』や『文明論之概略』に見られ、後半期のそれは「明治十四年の政変」に端を発するものである^{★56}。

前半期の儒教批判の表われの一つが『学問のすゝめ十編』の「芸術」の概念であることは、前述のことから推察できるであろう。『学問のすゝめ』が現われた1870年代にはヨーロッパ美術史でも反アカデミズムが潮流になり、「学問」としての芸術はすでに歴史概念であったが、わが国の思想史における福澤の「芸術」の概念の意義は過小評価されてはならない。

後半期の儒教批判は「明治十四年の政変」と前後して起こった教育政策の変革に関連する。それは『時事新報』の明治24年（1892）9月11日の社説「教育の方針変化の結果」に表われている。この社説は「明治十四年来、政府の失策は一にして足らずといえども、我が輩の所見をもってすれば、教育の方針を誤りたる一事こそ、失策中の大なるものと認めざるをえず」と説き起こして、次のように述べている。

「そもそも十四年来、政府の当局者は、何の見るところありてか、にわかに教育の方針を一変し、維新以来、多少の艱難かんなんを経て、ようやく

社会に跡を収めんとしたる古学主義を復活せしめ、いわゆる鴻儒碩学^{こうじゆせきがく}〔学問の深い漢学者^{へい}〕の古老先生を学校の教師に聘し、あるいは新たに修身書^{へんしゆせんてい}を編輯撰定して生徒の読本にあて、はなはだしきは外国語の教授をとどむる等、もっぱら古流の道德を奨励して、満天下の教育を忠孝愛国の範囲内に跼蹐^{きよくせき}〔局限〕せしめんと試みたる、なおその上に、学校の教育のみにては未だ充分ならずと心得たることならん、ひそかに資金を投じてその流に不似合なる新聞紙演説等の事を奨励し、もって文明進歩の大勢をとどめんとして余念なかりしは、世人の今日なお忘れざるところなり。』★⁵⁷

福澤は『福翁自伝』(1898年)でも同じように語った。

「ソレカラ大隈の辞職〔明治十四年の政変のこと〕とともに政府の大方針が定まり、国会開設は明治二十三年と予約していろいろの改革を施すうちにも、従来の教育法を改めていわゆる儒教主義を復活せしめ、文部省も一時妙な風になってきて、その風が全国のすみずみまでもなびかして十何年後の今日に至るまで政府の人もその始末に当惑しているでしょう。」(自伝 281 頁)

これは明治 14 年以來の国粹主義的風潮を批判したものである。「鴻儒碩学の古老先生を学校の教師に聘し」は、すでに同 14 年 1 月 31 日の文部省通達によって、碩学老儒に無試験で修身科教授の免許を与えたことに見られる。これは明治 6 年 (1873) に文部省入りした旧佐倉藩士・儒者西村茂樹 (1828-1902) が、編書課長として省内で幅を利かせた結果であると思われる★⁵⁸。

明治政府の反動的な教育政策は工部大学校にとっても災厄であった。明治 14 年 7 月に工部大学校は「本朝学」の教科を加え、和文と漢文の素読、講義、作文等を教授することにした。明治 10 年 (1877) の「工部美術学校諸規則」が、「欧州近世ノ技術ヲ以テ我日本国古来ノ職風ニ移シ」と「学校ノ目的」を立てたことを考えれば隔世の感がある。明治 15 年 (1882) 6 月 1 日に工部大学校都検ヘンリ・ダイアーは辞任して帰国し、前述のように同年 8 月に工部美術学校教官ラグーザも日本人の妻を連れて帰国した。彼らの離日は政府の反動化を嫌忌したためであろう。他方、明治 11 年 (1878) に東京大学が招聘したアメリカ人教師フェノロサ Ernest Francisco Fenollosa (1853-1908) は、彼に学んだ岡倉覚三 (天心、1862-1913) と組んで明治 14 年以降の国粹主義の時流に乗って、もてはやされた★⁵⁹。

明治十四年の政変

「明治十四年の政変」は明治 14 年 (1881) 10 月 11 日に起こった政治史

の事件であり、本稿では傍註として触れるにすぎない。この政変を小泉信三は「薩長藩閥政府の発作的痙攣とも評すべきクウ・デ・タア事件」と呼ぶ★⁶⁰。明治14年の参議に名を連ねた伊藤博文、井上馨、旧佐賀藩士大隈重信（1838-1922）、旧薩摩藩士西郷従道（1843-1902）のうち、大隈は明治14年3月に私案の国会開設意見書を左大臣有栖川宮熾仁親王^{ありすがわのみやたるひとしんのう}に提出した。それは明治15年末に議員を選挙し、明治16年初めに議院を開くという急進論であった。これを機に伊藤と井上は同志大隈と袂を分かち、大隈は罷免された。「明治十四年の政変」の結果、慶應義塾出身の犬養毅^{つよし}（1855-1932）、尾崎行雄（1858-1954）、中上川彦次郎（福澤の甥、1854-1901）、矢野文雄（1850-1931）が官界から排斥され、文部少輔九鬼隆一のみ在任した★⁶¹。下野した大隈は小野梓^{あずさ}らの尽力で明治15年（1882）10月21日に東京専門学校を開校した。これが早稲田大学の前身である。「明治十四年の政変」に絡んで福澤と中上川は明治15年3月1日に『時事新報』を創刊し、福澤はこの紙上で論陣を張った。前述の「教育の方針変化の結果」の発表機関もこれである。

東京美術学校について述べる紙幅はもはや残されていないが、文部省がその創設を決定したのは明治20年（1887）10月であり、この年に国風絵画（日本画）の教育を建議した行政官である慶應義塾出身の浜尾新^{あはた}（1849-1925）を校長、岡倉覚三を幹事（明治23-31年の間の校長）に任じて明治22年（1889）2月に開校した。このために尽力した日本画家狩野芳崖は明治21年11月5日に没していた。当初の学科編成では絵画科は日本画科、彫刻科は木彫科、美術工芸科金工部は彫金科と同義であり、工部美術学校のようにヨーロッパ美術を修得させる方針はなかった。西洋画科の設置は明治29年（1896）7月に洋画家黒田清輝（1866-1924）と久米桂一郎（1866-1934）を講師に迎えた時である。一方、工部美術学校出身の洋画家小山正太郎、浅井忠らは、鉄砲洲時代の福澤塾で学び官界で栄達した渡辺洪基^{こうき}（1847-1901）を会長に立てて、明治22年6月に在野の洋画団体「明治美術会」を起し、10月に上野公園不忍池畔で第一回展を開いた。

註

- ☆1 —— 福澤諭吉の著作の引用は、できるかぎり現在市販の比較的新しい版による。『福翁自伝』ワイド版岩波文庫、1991年【略号：自伝】——『学問のすゝめ』岩波文庫、1978年——『文明論之概略』松沢弘陽校注、岩波文庫、1995年——『福沢諭吉教育論集』山住正己編、岩波文庫、2001年【略号：山住 2001】——『福沢諭吉の手紙』慶應義塾編、岩波文庫、2004年【略号：手紙 2004】
- ☆2 —— 工部省関係の資料は、東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史 通史一』【略号：通史一】と『東京大学百年史 資料一』【略号：資料一】（東京大学出版会、昭和59年）のほか、次のものを使用する。高橋誠一郎「明治十四年の政変と日本美術界」『三田評論』1963年6月号【略号：高橋 1963（1）】——高橋誠一郎「明治十四年の政変と日本美術界（その二）」『三田評論』1963年7・8月号【略号：高橋 1963（2）】——古屋野素材「工学寮（工部大学校）と英国の科学・技術教育の発展」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第15号、1975

- 年【略号：古屋野 1975】——三好信浩「工部大学校の教育」『広島大学教育学部紀要第一部』24、1975年【略号：三好 1975】——三好信浩「工部大学校都検ヘンリー・ダイアー考」『教育学研究』第43巻第1号、1976年【略号：三好 1976】——館 昭「日本における高等技術教育の形成—工部大学校の成立と展開—」『教育学研究』第43巻第1号、1976年【略号：館 1976】——酒井忠康『魂の樹』小沢書店、1988年【略号：酒井 1988】——青木茂・酒井忠康校注『美術』日本近代思想体系17、岩波書店、1989年【略号：青木・酒井 1989】
- ☆3 ——「工部学校取建の儀に関する工部省建言」。資料一、74頁。
- ☆4 ——明治4年8月14日の太政官布告は工部省の官制を定め、第一等寮に工学寮・勸工寮・鋳山寮・鉄道寮、第二等寮に土木寮・灯台寮・造船寮・電信寮・製鉄寮・製作寮、一等司に測量司を置いた。資料一、76頁。「工学寮」は工学校の別称ともなる。同校は全寮制であった。なお東京・大阪間の電信開通、新橋・横浜間の鉄道開業は明治5年のことである。
- ☆5 ——「工学校略則」。資料一、77頁。
- ☆6 ——山尾庸三の職は明治5年6月27日の「工学寮職制並事務章程」では工部少輔、明治6年7月の「工学寮入式並学課略則」では工部大輔である。資料一、78-81頁。なお山尾の血縁に慶應義塾塾員の故山尾敏郎氏と世良喜久子氏がいる。
- ☆7 ——小泉信三『福澤諭吉一人と書翰一』新潮文庫、昭和30年【略号：小泉 1955】、78-79頁。
- ☆8 ——註2の高橋 1963 (1) および高橋 1963 (2) がそれである。
- ☆9 ——小泉信三「澤木四方吉と慶應義塾」『三田評論』1963年1月号所載。澤木 四方吉 (1886-1930) の伝記は彼の主著『美術の都』の岩波文庫版 (1998年) に付した拙稿「解説」を参照のこと。
- ☆10 ——明治9年11月の『学問のすゝめ十七編』で「或いは書画の友あり、或いは碁将棋の相手あり」と言う。
- ☆11 ——福澤は「維新の初に神仏雑居〔習合〕を禁ずる説行はれてより、之が為に宮寺の風景を損じたること少なからず」と言う。『福澤諭吉全集』第4巻、岩波書店、昭和34年、521-523頁。高橋 1963 (2)、11頁。
- ☆12 ——福澤が万延元年 (1860) にサンフランシスコで現地の写真屋の15歳の娘と共に撮った写真、文久元年 (1861) 12月から翌年12月までヨーロッパに派遣された時に撮った写真は初期のものである。明治33年 (1900) に銀 (きん) 夫人と共に東京芝新橋 (あたらしばし) 角・国会議事堂前の丸木写真館で撮った最晩年の写真に「明治三十三年写真福澤諭吉夫妻共に旧奥平藩の士女なり」という添書きがある。福澤諭吉展委員会『福澤諭吉展』慶應義塾、1984年、図49、57、56、85。
- ☆13 ——『福澤諭吉展』2009年、1-16。林えり子『福澤諭吉を描いた絵師 川村清雄伝』慶應義塾大学出版会、2000年、155-160頁。
- ☆14 ——大駒誠一編『学問のすゝめ・文明論之概略・福翁自伝・総文節索引』(慶應義塾大学福澤研究センター、1998年) では「芸術」は一例のみがあげられている。
- ☆15 ——杉田玄白『蘭学事始』緒方富雄校註、岩波文庫、1982年、35頁。
- ☆16 ——高橋 1963 (2)、6頁。
- ☆17 ——青木・酒井 1989、429頁。高橋 1963 (2)、7頁にも部分的に引用されている。
- ☆18 ——福澤の語彙では「文学」は「人文科学」の意。『学問のすゝめ六編』の「文学科学」も同じ意味である。
- ☆19 ——フォンタネーはフランス語で講じたが、その邦訳は青木・酒井 1989、211-222頁に収録されている。特に211-212頁を参照。
- ☆20 ——拙著『ホルバインの生涯』慶應義塾大学出版会、2007年、274頁。
- ☆21 ——拙著『デューラーとその故郷』慶應義塾大学出版会、2006年、154-156頁。

- ☆22——「工部学校取建の儀に関する工部省建言」。資料一、74 頁。
- ☆23——資料一、81 頁。
- ☆24——資料一、77 頁。「都検」の職は、西郷隆盛が近衛都督（ととく）であったように軍事などを統率する司令官「都督」「都統（ととう）」、寺社の総務を監督する「検校（けんぎょう）」の例から類推すれば「校長 principal」に相当する。職階は大丞と同様に四等官である。なお、明治 8 年 2 月 2 日の「工学寮ヨリ工部省へ伺」は、「小学校ハ現ニ予科修業之学場ニ有之〔、〕名義乖戾（かいれい）致候間〔中略〕是迄之小学校ヲ中学校〔中略〕幼年生教場ヲ小学校ト相定度候間此段相伺候也」と申し立て、「工部省指令」は直ちに「伺ノ通可致改正候也」と応諾した。資料一、84 頁。
- ☆25——田中彰『高杉晋作と奇兵隊』岩波書店、1993 年、46-51 頁。
- ☆26——三好 1976、3 頁。
- ☆27——館 1976、18-20 頁。
- ☆28——三好 1975、77 頁。館 1976、15 頁。
- ☆29——拙稿「ゼンバーのフォーラム計画」、三田芸術学会『芸術学』5 号、2001 年。拙稿「書評 ヤーコブ・ブルクハルト『チチェローネ——イタリア美術作品享受の案内〔建築篇〕』瀧内慎雄訳」、三田芸術学会『芸術学』11 号、2007 年。
- ☆30——「工部学校取設に関する諸入費其外見込取調書」。資料一、74-75 頁。
- ☆31——資料一、77-78 頁。
- ☆32——資料一、83-84 頁。「之レアリ候得共」を館 1976、5 頁に従い「之レアリ候得者」と改訂する。三好 1976、5 頁によれば、全生徒を官費生としたいという伺は、ダイアーの主張を入れた結果である。
- ☆33——明治 6 年 7 月 27 日には「伺之通」とのみ記録した後、「但官費生徒之儀ニ付文部省給貸生徒ノ学芸ニ不劣者ヲ撰挙可致事」と書き、これが次に述べる官費生と私費生の区別の根拠となる。資料一、84 頁。
- ☆34——資料一、81 頁。
- ☆35——三好 1976、4 頁。
- ☆36——資料一、86 頁。館 1976、18 頁によれば、明治 11 年の入学者は全員が私費生であり、同 12 年には官費生が例外的な扱いになっている。
- ☆37 明治 2 年 8 月の「慶応義塾新議」。山住 2001、194 頁。これらの金高（両＝金貨で 1 分の 4 倍。分＝1 両の 4 分の 1、または 1 文の 10 分の 1。匹＝25 文）が高いか安いかの判断は私の任ではない。
- ☆38——小泉 1955、127-141 頁；手紙 2004 年、82-96 頁。
- ☆39——三好 1976、3 頁。
- ☆40——山住 2001、51-52 頁。
- ☆41——資料一、84 頁。明治 15 年 8 月 19 日に「工部大学校を工作局ヨリ分離シ本省ノ直轄ト為ス」と改める。
- ☆42——館 1976、19 頁によれば、「建築学が工部大学校に取り入れられた事情は明治政府の近代国家としての体面整備、中央集権国家の威厳誇示の必要からの欧米風建築の輸入にあった〔後略〕。」
- ☆43——通史一、407 頁。
- ☆44——通史一、500 頁。
- ☆45——通史一、699 頁。
- ☆46——太政大臣三條実美が天皇から奉勅し、「工部省ヲ廃シ鉱山工作ノ事務ハ農商務省ニ〔、〕電信灯台ノ事務ハ通信省ニ〔、〕工部大学校ハ文部省ニ属セシメ〔、〕鉄道事務ハ当分ノ内内閣ノ直轄ニ属セシム」と下達した。資料一、97 頁。
- ☆47——通史一、939 頁。
- ☆48——三好 1975、82 頁。
- ☆49——通史一、938 頁。
- ☆50——慶應義塾は明治 6 年 10 月三田に医学所を開設したが、明治 13 年 6 月に廃校し、主宰者松山穂庵が同年 8 月 31 日に東京府知事に届け出た。『慶應義塾百年

- 史』上巻、昭和33年、慶應義塾、502-503頁。
- ☆51 — 森鷗外の後を大村西崖が審美学を担当したが、明治33年に一旦消滅し、39年に「美学」として復活した。参照、海津忠雄・加藤明子「審美学百年資料 澤木四方吉年譜」慶應義塾大学三田哲学会『哲学』第94集、1993年。
- ☆52 — 註29の拙稿「書評 ヤーコブ・ブルクハルト『チチェローネ』」参照。
- ☆53 — 高橋 1963 (2)、7頁。
- ☆54 — 酒井 1988、341頁。
- ☆55 — 新渡戸稲造『武士道』(1899年)矢内原忠雄訳、岩波文庫、1974年、138頁。なお、新渡戸は1928年の『東西相触れて』の「序」で再三「福澤先生」の名前をあげて敬意を払っている。
- ☆56 — 丸山眞男「福沢諭吉の儒教批判」、所収『福沢諭吉の哲学』松沢弘陽編、岩波文庫、2001年。
- ☆57 — 山住 2001、142-143頁。
- ☆58 — 西村茂樹は明治6年7月の「明六社」結成に働いた。福澤も明六社のメンバーであった。参照、大久保利謙『明六社』講談社学術文庫、2007年、23-30頁。西村は明治9年に東京修身学社、明治20年に日本弘道会を起して儒教主義的な徳教を広めた。
- ☆59 — 高橋 1963 (2)、8頁。
- ☆60 — 小泉 1955、35頁。
- ☆61 — 高橋 1963 (2)、8頁。九鬼隆一は播州三田藩出身。明治3年(1870)に慶應義塾に入った。「明治十四年の政変」の時に大隈と福澤と三菱の岩崎弥太郎に陰謀ありという蜚語を捏造して大隈を失脚させた張本人である。明治17年から特命全権公使としてアメリカに駐劄、明治21年に帰国して宮内省図書頭、同年9月27日に同省臨時全国宝物取調委員長、次いで宮中顧問官および帝室博物館総長の要職を歴任した。高橋は九鬼を「政変後の極端な反動政策の推進者の一人となった」と批判している。なお、九鬼隆一の息子に九鬼周造がいる。

【付記】

本稿の執筆にあたって、慶應義塾大学の名誉教授紺野敏文君に明治初年の官庁用語の読みを教わり、福澤研究センター専任講師都倉武之君と同係主任赤堀美知子君の助言を得た。これらの諸君の御好意に謝意を表する。

(かいづ ただお・慶應義塾大学名誉教授／美学・西洋美術史)